

「光となった」

エペソ人への手紙 5 : 8

October.20.2024

エペソ人への手紙 5 : 8 (パウロ)

Preface

「あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあつて光となりました」という御言葉を黙想していると、大学3年生の頃、初めて主イエス様を信じた夜が明けて、ホームステイ先のベッドから起き上がった時、レースのカーテンを通し、またその隙間を縫って部屋を照らすように入ってくる日の光の美しさを思い出しました。

二日前と何も変わっていない部屋、ベッド、外の世界、日の光であるはずなのに、イエス様を信じる前と信じた後では、目に入ってくる情景が全然違うように映るのです。

「こんなに光って美しかったかなあ。こんなに空って青く広く麗しかったかなあ。こんなに木の緑って癒しと慰めに満ちていたかなあ」と思ってしまう程に、イエス様を信じる前と信じた後では、世界が違って見えました。

Part One

それまでは、どんなに日の光を見ても、それが美しいとは認識出来ていなかった。

何をしても何だか霧のような雲のようなものが目の前に掛かっていたということにも気付かず、木々の織り成す鬱蒼と茂る緑を見ると、「美しい」という思いの代わりに、「不気味だ。怖い。お化けが出そうだから、怖くて近寄れない」という闇の中を過ごしていたということに、イエス様を信じた日の夜が明けて、朝の光を見た時、一瞬にして悟らされました。

霊的目を霞ませ見えなくしていた霊的霧と言っていいのでしょうか、頭の中なのか、心の中なのか、たましいなのか、イエス様を信じると、目の前の霧が綺麗さっぱり晴れて光が差すという目が開かれる経験をしたことを今でも思い出すことができます。

先週学びましたように、創世記1：3の「光、あれ」という神の言葉そのものであるイエス・キリストというまことの光なるお方に、私の闇なる体を、私の闇なる霊を、私の闇なる人生を照らして頂き、まことの光を知る者となりました。

今日の御言葉に照らし合わせるならば、「洪豊和は以前は闇でしたが、今は、主にあつて光となりました。光の子どもとして歩みたい」ということが、私に起こりました。

正に、聖霊によってイエス・キリストを信じるにようされ、新しく生まれるということをもつて経験致しました。

そして思ったのが、「ああ、これは宗教なんていう人や悪霊が作ったちんけな枠に収められるようなものではない。キリスト教はキリスト教という宗教ではなく、選択でもなく、人が人として生まれて来たからには、誰もが知らなければならない事実、悟らなければならない義務、人が人であるための必要絶対条件、基礎、土台、核心的な

んだ」と、「それまで見えなかったものが見えるようになる、目が開かれることなんだ」と、「人が、問題を抱えながらもがいているすべての根本的な原因は、まことの光なるお方を知らずに、闇の中を彷徨っているからなんだ」と、「ならば、これを皆に知ってもらわなくちゃならない！」ということでした。

それからというもの、私にとってイエス様を伝えることは、恥ずかしいとか、どう思われるのだろうかということよりも、美味しものは美味しい、楽しいことは楽しい、面白いことは面白いと伝えることと同じようなこと、対して変わりはないこととなりました。

学校でも、バイト先でも、勤め先でも、友人同士でも、先生に対しても、ご近所さんでも、「イエス様という光なるお方を知らないことが、その悩みの、その痛みの、その怒りの、そのひねくれの、その寂しさの、その恐れの本来的な原因なので、イエス様信じないと大変なことになりますよ」という事実を示すことでしかなく、何かの宗教に入信させることを目的とする何か怪しいことをしているのではなく、ただある事実を語り、その光のうちに生きるだけということです。

問題なのは、事実を示しても、事実として受け入れられないということが悲しくもあり、この地上における歩みの葛藤でもあり、寂しさであるということです。

Part Two

今日の御言葉エペソ書 5 : 8 で使徒パウロは、「あなたがたは以前は闇でしたが」と語りますが、正に、イエス・キリストという光なるお方を知らないことは、闇そのものです。

闇の中を手探りしながら彷徨っているというレベルではなく、その闇をさらに深く濃くしてしまう闇そのものが、私たち、生まれながらの人間です。

ローマ書に行ってみましょう。

ローマ人への手紙 1 : 22 - 2 : 1 (パウロ)

私たちに弁解の余地はありません。

自らが闇であるということにおいて、弁解の余地がないのが私たち人間です。

「神を知ることによって価値を認めようとせず、無価値な思いの中、してはならないことをやり続けているのが私たち人間だ」と言います。

「あのこの人よりもマシだと思い、その人を見下し、裁き、優劣を付けたがっていること事体が、自らが闇であるということの証拠だ」と言います。

闇が厄介なのは、闇自ら闇であることに、どこまで行っても、いつまで経っても気付き得ないということです。

闇の中に闇が入っても、闇を闇が取り囲んでも、互いに闇であり、闇に闇を足すのか掛け合わせることでしかないために、闇自ら自分が闇だということに気付かせません。

じゃあ、いつ、闇が闇だと気付けるのか？

光が照らされた時のみです。

光が照らされた時、その時、初めて、闇だったということに気づき、自らが闇なる

存在であったということに気がきます。

そして、「その光なる唯一のお方が、イエス・キリストだ」と、神によって直接啓示されました。

その光の前では、覆われたままでいられるものは何一つ存在せず、隠されているもので知られずすむものは何一つない、万物がむき出しにされる物事すべての根本であり、始まりである「光、あれ」と神さまが仰ったあの光が、イエス・キリストですね。

聖書は一貫して同じことを語ります。

「今、この世界に足りない、必要な唯一のことは、光に照らし出されることだ」と、「イエス・キリストという光に照らし出されることだ」と語り続けます。

Part Three

光と闇というコントラスト、決して混じり合うことも共存することもない究極の対比について、聖書は創世記の始めから黙示録の最後まで語り続けます。

そして、光は神であられ、闇は、神のなさるすべてのわざにことごとく相対しようとするサタン、悪霊、もろもろの霊に属するものであると教えてくれます。

ヨハネの黙示録を見ますと、365日一日24時間かけながら地球が太陽の周りを回りつつ、光の象徴である昼と、闇の象徴である夜を作り出していることも、神さまが私たち人間に、光なる神イエス・キリストに対して、闇なる悪霊の存在を知らしめるためだということが書いてあります。

だからこそ、悪いことはいつも、人の内側という闇を含めたありとあらゆる闇の中で行われ、何だか闇を前にすると本能的に怖いような気がするんだと思います。

では、闇の何が問題かと言いますと、この闇が光を装って、本来神のかたちに造られた人を惑わし、惑わされた人々は、まことの光よりも闇を愛すようになってしまったということなのです。

後ほど見ますが、ヨハネの福音書3：19で、「人々が光よりも闇を愛した」と言っている状態に陥ってしまったのが、私たち人間の根本的な問題ですね。

先程も言いましたように、闇は闇自ら、「自分が闇である」ということには気付かせません。

闇が闇であることに気付くためには、光が必要です。

そして、その光としてこの地上に来て下さったのが、イエス・キリストですね。

ところが人は、この光を見ても気付こうとしない、見えても見えない、聞いても聞こえない、触れても何も感じないという程に、深い深い闇そのものとなってしまいました。

闇の中にカッコよさを見出し、闇の中に権威を持たせ、闇の中に楽しみを見つけ、闇の中で見えている風を装い、闇の中に自由を宣言し、闇の中に価値のようなモノを作り、闇の中にプライドを覚え、闇の中に知識を立ち上げながら、闇の中を彷徨っています。

どれほどに闇なのかと言いますと、闇の根本である悪霊たちは、イエス様のことを見ると、走って来て拝しながら、大声で、「いと高き神の子イエスよ、私とあなたに何の関係があるのですか。神によってお願いします。私を苦しめないで下さい」と、悪霊のくせして神の名まで出しながら、イエス様がどういうお方なのかを認識し、懇願しますが、闇である人間たちは、イエス様のことを見ても、何とも思わないどころか、利用価値があると思った時には利用しようとし、自分たちの闇の物差しで利用価値がないと感じたならば殺そうとし、実際に殺してしまいました。

光なるお方に対して、自分たちの闇をもって覆いかぶさって窒息させてしまおうという不可能ことを可能だと思い、覆いかぶさろうとしました。

ヨハネの福音書3章を見ますと、社会的地位もあり、学歴もあり、それなりに人から認められるような生き方をして来ただろうと思われるニコデモという人が、イエス様のところに訪ねて来て、「私は、自他共に認める、それなりに恥ずかしくない生き方を生きてきた者ですが、そんな私から見てもあなたがご立派な方だということはすぐに分かりました。私もそれなりに立派だと言われるようなものを身に付けてきたと思うのですが、これ以上立派になるには、何が必要で、何をもっと付け加えればいいんでしょうかね？」というような自らが闇であるということは露も知らないかのように、この世の価値観の延長線上のようなものの見方で、自分や人を量っている思いが駄々洩れのような言葉をイエス様に投げかける場面が記されています。

人目が気になってか、闇を象徴する夜に、イエス様のところに来たということにも、その心境が表れているのかなあと思います。

そんなニコデモにイエス様は温かい眼差しで、「人は新しく生まれなければ、神の国を見ることは出来ません。人は聖霊によって新しく生まれなければ神の国に入ることも出来ません。キリストであるわたくしイエスを信じる者はみな、永遠のいのちを持ち、光を知り、光の方に来るようになります。それまで光を憎み、闇を愛していたことに気付くようになります。光を憎むことを辞め、闇を愛することを辞め、今あるあなたという存在に何かを付け加えようとするのではなく、光であるわたしを信じなさい。そして、新しく生まれなさい」とお応えになりました。

ヨハネの福音書に行ってみましょう。

ヨハネの福音書3：1－21

ニコデモは、「何を付け足せば、より良い立派な人間になれるでしょうか？」という思いでイエス様に尋ねましたが、イエス様は、「付け足したところで、闇は闇であり、そんな闇を愛しているのがあなたがた罪人です。あなたがたが変わる唯一の方法は、付け足すことではなく、キリストであるわたしを信じ、聖霊によって新しく生まれることです。

キリストを信じ、聖霊によって、新しく生まれたい限り、闇を愛することを辞めることも出来ず、光を憎むことも辞められず、いつまでも、立派な人になるとか、誰が立

派なんだという闇の価値観に閉じ込められたままで、やがて、永遠の闇の中で永遠の滅びに至ってしまいますよ。もう既に世に来ている光、あなたの目の前にいる生けるまことの光であるわたしを信じなさい」とお語りになりました。

このイエス様のお言葉通りに、主イエス様を信じるならば、その人は光となります。幸いにも、初めの動機や思いはどうかであれ、イエス様というお方に何かを感じて出て来たニコデモは、ヨハネの福音書を読み進めて行きますと、主イエス様を信じる者へと変えられたらうことが見えてきます。

そして一説によりますと、イエス様を信じる者となったためにののしられ、悪行を浴びせられ、イエス様のために辱められるに値する者とされたことを喜びながら、光のうちに住まい、子羊イエスが明かりである天の御国・新しい天と新しい地に希望を馳せながら殉教して行ったと言われています。

Part Four

「あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあって光となりました」と使徒パウロ先生が仰っていますように、闇であった私たちも、主イエスにあって光となりました。

ただし、ここで終わりではありません。

続く言葉を見てみましょう。

エペソ 5 : 8 (パウロ)

光の子どもとして歩みなさい。

光となったならば、光として歩むという使命が自然と付与されます。

ある意味、それこそ、私たちがクリスチャンとなって直ぐに天の御国へと引き上げられるのではなく、この地上を生きなければならない理由ですね。

使徒パウロも、このことについて悩んだように見受けられます。

第一コリントを見ますと、『神さまは、人を光として用いなさる代わりに、ご自身光であられるお方なのだから、ご自分お一方で、一気に人々を照らし、ご自身が神であられることをお示しになれば良いのに、なぜそうされないのだろうか』と悩んだけど、神さまは、『私たちとともに、私たちをお用いなさって』という私たちにはまどろっこしくて、愚かにしか思えない方法をお取りになるとお決めになったほどに、私たちが愛しておられる。

私たちが光の子として生きることを通して、私たち同士が、キリストをかしらとして繋がり合うことを何よりも望んでおられる。

そして、私たちが闇とともに永遠の滅びに至ることに較べたら、ご自身が死なれる方が安いと、闇である私たちの価値を、神であられるご自身よりもあると心底思っておられることを、光の子とされ生きることを通して知って行って欲しいと願っておられるんだ」ということを悟ったことが見て取れます。

第一ヨハネに行ってみましょう。

ヨハネの手紙第一 1 : 5 - 10 (パウロ)

ヨハネの手紙第一 2 : 8 - 11 (パウロ)

ヨハネの福音書、ヨハネの手紙、ヨハネの黙示録を書いた12弟子の中で最も若かったヨハネほど、神が光であられるということを悟る啓示を受け、その啓示を書き残した人はいないように思います。

ヨハネは、神が、キリストが光であられること、それに反するすべてのことは闇であることを徹底して語ります。

そして、その闇の本質を大きく二つに分けます。

一つ目は、自らが、先程ローマ書で見ましたようなありとあらゆる罪の項目において罪人であることを認めようとしないこと。

二つ目は、人と比較をして、いつも自らの正しさばかりを思い、口にし、他者の間違いばかりを主張し、人を裁くことをもって自らの優越性を保とうとする憎しみを抱くことを闇と言います。

つまり、光の子らしく、光の子どもとして歩むことは、常に自らが罪人であることを認め続けること。

そして、他者を憎み、裁く前に、自らが闇の中に未だに生きている、闇の中に生きることに甘さを覚えている、闇の中に隠れていたいという罪が我が内に住んでいることを先に覚えながら生きることですね。

イエス様は、「敵を愛しなさい。裁いてはいけません」と仰いましたが、この御言葉の恵みを誰よりもその身に帯びていたのが、使徒パウロという方だったと思います。

パウロは正に、キリスト者の敵として生きることには情熱を燃やし、命を懸けてキリスト者たちを取っ捕まえ、殺す者でありました。

そんなクリスチャンたちにとっての最大の敵だったような人が、まさか、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのですか」と、幻のうちに、イエス様に直接語りかけられながらクリスチャンとなり、使徒となり、伝道者となっていくことを誰が予想したでしょうか？

最大の敵が、仲間になったのです。

「神のなさることは時にかなって美しい。殺すのに時があり、癒すのに時がある。泣くのに時があり、笑うのに時がある。嘆くのに時があり、躍るのに時がある。神のなさることはすべて時にかなって美しい。しかし人は、神が行うみわざの始めから終わりまで見極めることは出来ない」という真実の言葉を、パウロの回心を通して、初代教会の聖徒たちは体験しました。

私たちにも、憎しみが終わる時を、戦いが終わる時を、傷つけ、崩し、引き裂くことが終わる時を、神さまは備えておられます。

ならば同じく、「神のなさることはすべて時にかなって美しい。人は神が行うみわざの始めから終わりまでを見極めることは出来ない」という御言葉の前に遜りながら、

先ず自分のことを、光なるイエス様の前にある自分の闇を探っかなければならないでしょう。

そうして、神が備えて下さっている時を期待し、待ち、信じながら、先ず、私自身が罪人であることを認め、ともすると、闇の中を歩んでいることにも気付かずに、自分の正しさを叫びながら兄弟姉妹を憎むことが常態化しているだろうことを告白していく必要があるでしょう。

Conclusion

以前、今は他の教会で誠実に忠実に信仰生活を送っておられるある方が、突然私のところを訪ねて来て下さり、「洪先生、ごめんなさい。申し訳ありませんでした。あの時、洪先生のことを批判し、教会を批判するようなことを押しかけながら口にしてしまい、本当に申し訳ありませんでした」と、涙ながらに謝って下さったことがありました。

私も正直、そういうことがあって、その方に対して憎しみの思いが湧き上がってきて、ずっとそのことを祈っていましたので、そんな風に仰って下さったことに逆に申し訳なくもあり、神さまに対しても申し訳ない思いと感謝の思いでいっぱいになりました。

私たち人間、イエス・キリストを信じ光とされてもなお、自覚無しに闇を選び取り、闇の中を歩んでしまう恐れを常に持ち合わせていることを、その時改めて、気付かされました。

私たちを、空しいことばをもって、虎視眈々とだまそうとするこの世のもろもろの霊から離れて、神の言葉の前に自らを吟味しながら、光の子らしく、光の子として共に歩んで行きましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 5：8